

宮ノ丘幼稚園

札幌市

全ては子供たちの未来のために

現代都市部の子どもたちを取り巻く状況はとても複雑になっている。核家族化、少子化、人口減少などの影響により他者とのコミュニケーションが希薄になっている。人の暮らしと自然との距離が遠くなり、日々の生活で自然の大切さを実感する場面が少なくなっていることも課題となっている。幼稚園は子どもの暮らしの場であり、この時期に培った感性が将来の成長に大きく影響するため、心身の健やかな成長を支える環境を備えることが重要である。

この幼稚園は都市部にありながら、敷地は森、草原、水辺という豊かな自然を包括している。日々変化する自然の中で遊び育つことで自然や他者とのコミュニケーションを学び、地球環境に対する認識も実体験として育まれていく。友達や馬、先生以外も含めた大人との関わりの中で自分と他者の違いを知り、他者を尊重する心を育む。全ては子供たちの未来のために、既存の幼稚園の枠組みを超えた多くのチャレンジを行なっている。



背景

宮ノ丘幼稚園は北海道札幌市に位置する。札幌駅から約8km西に位置し、手稲山の山裾部で都市部と自然地の接する場所に35年前に開園した。

プロジェクトは2006年に始まった。園舎の老朽化、園児数の増加から新園舎建設の必要性に迫られたが、手稲山の麓に位置する斜面地で自然環境を尊重しながら必要な建築的機能を満たすことはハードルが高く、建築優位の発想では幼稚園の教育理念を壊しかねないと危惧した園長がランドスケープを軸とした計画としてプロジェクトをスタートさせた。

そのため、ランドスケープアーキテクトがプロジェクトの全体を統括し、建築計画をリードしつつ、環境調査、基本構想から実施設計までを全て担当した。計画・設計・工事と並行して教員や保護者、園児、地域住民らを含む参加型プログラムを取り入れ、このプロジェクトを機に幼稚園が地域にとってのコミュニティの場の実現に近づくように進めた。

むらのような幼稚園を目指して

敷地は当時0.9haであったが、プロジェクトのスタートにあたり隣接地を買取り1.7haとしてスタートした。この隣接地の獲得にはランドスケープの観点から大きな意義があった。当初の幼稚園は斜面地に草っ原の運動場と小さな小川が流れていた。これに加えて隣接地は手つかずの森であり、幼稚園の活動エリアとして新しい環境を手に入れることができた。幼稚園活動の多様性は森、草原、水辺とその環境多様性が格段に増したのである。現在は第3期としてさらに敷地を拡張し2.4haとなっている。

敷地環境と教育理念をさらに密接にするために、我々は子供をとりまく現代の環境についても話し合った。子どもを取り巻く社会状況の課題、子どもたちの成長と環境との関わり大切さ、感性と野生と知性を大切にする教育理念。この実現へ向けては、人と自然がお互いに良い関係で影響しあって生きる里山の暮らしと、年齢や目的の異なる様々な人が集い支え合うコミュニティが想起され、「むら」のような幼稚園を目指すことを目標とし、4つの基本的な考えを柱にプロジェクトを進めていった。

■「むら」のような幼稚園＝幼稚園を核としたコミュニティ形成■

環境に対する問題意識
癒し・やすらぎ欲求の高まり
自然の大切さへの認識向上
食の安全意識の高まり

環境意識の高まり
安心・安全・エコ

社会の流れに対する問題意識
核家族化や共働き世帯の増加
高齢者の増加など
みんなが「個」になってきている。

コミュニケーションや交流の機会の欠如
「つなぐ」場が必要

子どもに対する問題意識
子どもの数の減少
子どもの遊び環境の変化
犯罪の低年齢化

幼児教育の重要性の再認識
無条件に楽しいステージ
「最後の砦」

子どもを中心としたコミュニティ・地域社会の核となり
「むら」のような新しい幼稚園をつくる

4 PLINCIPLES

1 野生、健康を育む

のびやかな自然、生き物たちとともに

子どもたちは日々、変化に富んだ地形に点在する拠点を行き来する。斜面での遊び、森の中の活動、農作業等の軽労働を通して反射神経、強い足腰の基礎体力が自然に育まれる。ここでは敷地内斜面を活用したスキーや、水泳といった季節のスポーツに力を入れている。また乗馬は単に健康に寄与するだけではなく、生き物と触れ合うことを通して、優しさを育み、心の解放に寄与する。また、畑では春に野菜を植え、日々生長を実感し、秋に収穫し、自分たちが食するものになることを知る。世話をしている馬の糞から堆肥をつくり、野菜の栄養になることを通して循環を体感する。食べることを通して新たな感動を共有し、大切な味覚の原体験を重ねていく。様々な体験は現代に失われがちな「野生」を育んでいる。

2 感性を育む

五感に訴える環境、空間の育成

子どもたちの感性は幼児期の体験に強く影響される。この時期に様々なことを体験し、肌で感じ、身体感覚で記憶することは極めて大切である。この幼稚園が基本的に持っている自然の力を損なわないよう、自然と人工物のバランスを取り自然の優位性を保つことにとっても力を注いだ。そして長期的に自然環境を育成することも大切に考え、そのためのプログラムも作成した。

木の葉の揺らぎ、木もれ日、尾根を渡る風、風に揺れる草原、落葉、せせらぎの音、小鳥のさえずり、カエルの声、馬のいななき、森の匂い、夏草の匂い、焚き火、パンを焼く匂い、温度の変化、新緑、紅葉の葉の色、ヤマブドウの甘み、もぎたてのトマト、大工さんのハンマーの音、材木の匂い、木のぬくもり、土の手触り、札幌の街の眺め、子どものスケールの空間、森、水辺の教室、活動拠点、草原、森の集落、森の音楽会、森の創作展、林床に咲く山野草、桜の並木、雪の冷たさ、スキーで滑るスピード感、ハンモックでの昼寝。この幼稚園は子どもたちの五感を刺激するもので満ちあふれている。

3 創る喜びを知る

手間を惜しまず皆で作り上げるプロセスを楽しむ

人は自分たちの周りの環境に関わり、身の周りのものを自分で創ることに、楽しみを見いだしてきた。近年の効率化優先社会は、子どもたちの周りに画一的で無機質な空間を生みだしてきた。建築工事費、土木構造物にお金がかかり、ランドスケープにかけられる予算は限られていた。

私たちは園長と話し、自力建設で進めることとした。そのための体制としてバスの運転手に大工さんの経験者を迎え入れた。森の環境育成は父親も含めた森づくりワークショップを実施して動きだした。

このような体制を持つことは、環境を生き生きと活性化させ、生き物のように変化する自由度をもった幼稚園を可能にする。

このような日々の環境に接している大人の姿を見て、身体で感じて育った子どもたちは、皆で作り上げ、そのプロセスを楽しむ喜びを知って育っていく。

4 人とのつながりを育む

体感したことを計画に反映する

計画デザインの過程で先生、父母、園児などとワークショップを行い、計画の理念や目指す姿などを議論した。そのプロセスと並行して、森、施設整備を自力建設で行い、体験や感じたことを再び計画にフィードバックする柔軟な手法をとった。

幼稚園の仲間を拡げる

整備された環境を舞台に、多様な世代のコミュニティ活動が可能になった。ネーチャークラブは卒園児が自然の中で活動するクラブ活動。またアフタースクールは小学生を対象にした放課後の活動の場。大人を対象とした乗馬やアートスキーなども展開している。



落ち葉のプール



ポニーの乗馬



森づくりのワークショップ



大木の下教室

地域へ開かれた幼稚園に向けて アフタースクール棟の整備(2014)

第一期は先代が手稲山裾からつながる自然豊かなこの地幼稚園を立ち上げた25年間である。そして2006年から始まったリニューアル整備期間を我々は第二期と捉えている。この第二期は新園舎整備のプロセスにワークショップや参加型整備を多数取り入れ、幼稚園にスタッフ保護者以外もオープンにして幼稚園に多くの人に関わるきっかけを生み出した。この経験は幼稚園スタッフにとっては苦勞と発見の両面あったと思われるが、結果としてこの幼稚園の目指す姿を全員で体を使って理解共有していく重要なステップになった。先生方は環境に対して主体的になり、人材育成の面、幼稚園のプログラムの面ともに着実に成果を上げ、自然に密接な宮の丘の個性が磨かれてきた。

そして2014年アフタースクール棟の建設から幼稚園児以外の人も積極的に受け入れる「第三期」という新たなフェーズに入っている。

アフタースクールは小学生の学童保育と学習塾の両機能を備えた取り組みで、幼稚園の自然の中で遊んで過ごしたり、ネイティブスピーカーの英語レッスン等を受けられるようになっている。夏休みの特別プログラムとして幼稚園敷地でキャンプしたり、森の遊び場づくりなど多様な体験プログラムを展開している。また、幼稚園ではスキースクール、ホースアカデミーなど幼稚園の環境とスタッフスキルを活かしたプログラムを公開し、人気を得ている。主には子どもを対象にした取り組みであるが、保護者も同時に参加するケースも出ている。

また幼稚園を地域へオープンにする「オープンガーデン」の取り組みなども進め、幼稚園活動以外にも積極的に開かれた幼稚園を目指して様々な取り組みを進めている。



災害時への備えー地域の安心を確保する

宮ノ丘幼稚園では、10年以上前から災害時対策の重要性を感じ、冬季に災害が起こった場合も園児や保護者、近隣住民の方々の安全を確保する事を目指し、災害時対応への備えを進めてきた。停電になった場合にも暖が取れる薪ストーブ、必要最低限の電力の確保のため非常用ディーゼル発電機を備えている。また、食料の備蓄と手順の練習として、各学期ごとに年3回の「炊き出しパーティー」を行ってきている。

2018年9月6日の北海道胆振東部地震に起因する全道規模のブラックアウトの際には、これまでの準備・訓練を生かし携帯電話の充電や備蓄を使った炊き出しなどを、幼稚園関係者や地域希望者へ供給することができた。

幼稚園以外の取り組み ～みやのおひネイチャークラブ

宮ノ丘幼稚園では、卒業後も、幼稚園で出会う大切な友達とかわりをもつ機会、ともにこの豊かな自然環境の中で色々なことを学びながら楽しみたいという思いから、小学生を対象とした自然体験クラブ「みやのおひネイチャークラブ」を毎週1回開催しています。

自然体験を使った自然学習や観察、登山、びげ作り、流しそりめんなど、四季それぞれの楽しみながらプログラムを展開しています。

今年度は、以下のプログラムを予定しております。初めて取り組むものも多く盛り込まれています。今年も、たくさん思い出の多い楽しい活動になること間違いありません。楽しみにしていてください。なお、プログラムは変更した場合はホームページからお知らせいたしますことをご了承下さい。



幼稚園以外の取り組み ～スキースクール

宮ノ丘幼稚園では、冬のスキー教育にも力を入れています。寒い冬の中で、最初はうまくいきませんが、慣れてくれば滑れるようになるという達成感を知ることが出来ます。

北風に慣れている以上、冬に屋外活動やスポーツに取り組むことは、とても大きな財産になります。

長年プロとしてスキー指導に携わってきた園長が、保護者の皆様をはじめ、卒業生の学生にレッスンプログラムを提供いたします。

美しく、安全に上達するカリキュラムを是非ご体験下さい。

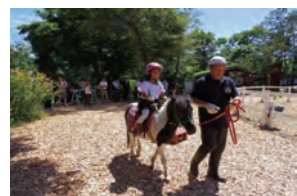


ホースアカデミー

宮ノ丘幼稚園では、馬の飼育・管理の体験を通して、子供たちの自然観察、動物の生態や飼育の楽しさを学び、動物の命を大切にする心を育てています。

園児が動物園で学んだ、動物の生態や飼育の楽しさを学び、動物の命を大切にする心を育てています。

動物園のレッスン内容や、体験・観察にまつまははるかなる思い出です。



地域コミュニティの「ハブ」となる

現在ではさらに高いレベルで環境を活用した教育や活動に取り組むため次のステップの検討に入っている。

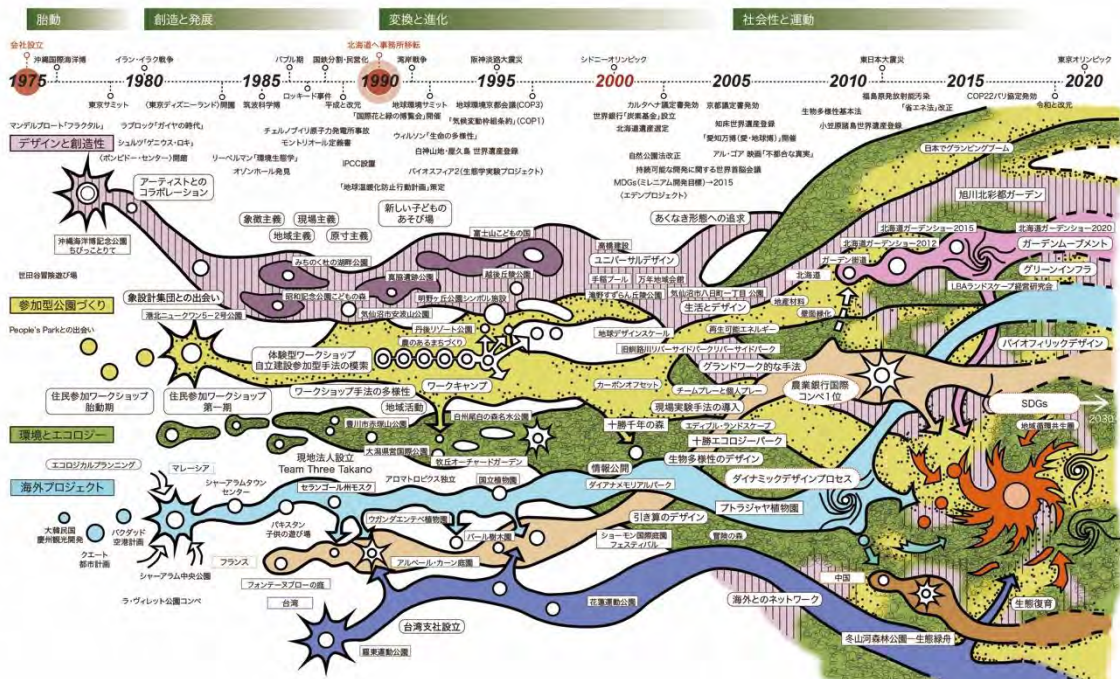
分棟にした現在の建築よりもさらに細分化した教室が単体で森の中へ手を伸ばすように展開し、日々の教育と森の環境が強く結びついた宮ノ丘を目指している。

幼稚園というのは社会の中で重要なコミュニティの「ハブ」とであると実感している。子どもの未来のために多くの人が集まり、支え合う。その舞台に豊かなランドスケープがあることで、多様なモチベーションが生まれ、人々の憩いの場となり、活動の場となる。薄れてしまった人々の交流の機会を増やし、つなぎなおす重要な役割を担っている。

この宮ノ丘幼稚園が原風景となり、ここで育った子どもの感性が自然と共生する豊かな社会を築き上げていく力になる姿を楽しみにしている。

高野ランドスケーププランニング株式会社

私たちはこれまで「デザイン」「市民参加」「環境」の3つのフィールドに取り組んできました。3つのフィールドは重なり合い、複合的な手法となり、今では全てのプロジェクトで確固たる基盤となっています。北海道を起点にして、おおらかな大地での展開は多様性を増しています。近年は海外進出も拡大し、プロジェクトも社会性を内包してきました。これからも、未来に向けて螺旋的な運動を一層継続していきます。





- 本社 北海道札幌市中央区北 20 条西 15 丁目 7-21
TEL 011-738-5661 FAX :011-738-5662
E-Mail :takano@tlp.co.jp HP: <http://www.tlp.co.jp/>
 - 十勝事務所 北海道河東郡音更町字万年西 1-37
TEL 0155-42-318 FAX :0155-42-3863
 - 東京事務所 東京都新宿区北新宿 1-4-9 柏木 VL102
TEL: 03-5937-4876 FAX :03-5937-4875
 - 湘南事務所 神奈川県中郡二宮町富士見が丘 1-26-6
TEL/FAX 050-3018-3410(IP)
 - 台湾支所 日商日亜高野景觀規劃股份有限公司台湾分公司
中華民國台湾省宜蘭縣羅東鎮復興路 3 段 316 巷 70 號
TEL : +886-3-965-5016 FAX : +886-3-965-3740
E-Mail : jatakano@ms24.hinet.net
-

ランドスケープの夢 高野文彰著 建築資料研究

学校法人景盛学園 宮ノ丘幼稚園の概要



駐車場からエントランスに向かうスロープ



草原の丘の頂上付近から見た風景



紅葉に彩られた水辺で遊ぶ子ども達



厳冬期（2月）の冬景色

所在地：札幌市西区宮の沢 490-11

敷地面積：26,075 m²、園舎床面積：1100.96 m²（大型温室を除く）

施設概要： 主要建築物 東棟、中央棟、水辺のコテージ（小学生学習用）、イングリッシュハウス（英語教育棟）、大型温室（288 m²）

その他施設 水辺の遊び場、冒険の森、草原の丘（専用スキー場）、丸馬場、厩舎、ビオトープ、屋上菜園、駐車場、花壇

在籍園児数：181名、アフタースクール在籍者数（小学生）：115名、教職員数：38名

沿革：1986年創立 「自然の中での多様な実体験」、「人とのかかわり」を教育理念の基盤に掲げ、小川が流れ、豊かな森がある起伏に富んだ8910 m²の敷地に自力建設を多用し開園。

2005年新園舎建設プロジェクトスタート

自園の教育理念をより高いレベルで実現すると共に現代の社会環境に育つ子供に求められる教育の実践を目指し、新園舎建設プロジェクトを始動。その後、2006年に園の隣接地8395 m²（山林）を追加取得し、高野ランドスケープ㈱、象設計集団の協力を得て、計画の実現へ移行。

2008年 新園舎竣工

教職員、保護者、卒園生、地域住民、学生、様々な分野の専門家の方とのワークショップを数多く開催し、環境整備を進める。

2009年 アフタースクール（小学生）事業開始

2014年 イングリッシュ・ハウス（英語教育棟）新築

2017年 園舎西側隣接地（屋内競技場側）8770 m²取得

2019年 「冒険の森」の計画着手